学ぶことに楽しさがある授業をめざして

～「サーカスのライオン」の学習を通して～

三原市立田野浦小学校　周才　規子

1　実践の趣旨

４月，クラス編成変えがあった３８名の児童とともに３年２組がスタートした。

スタートして間もない日，「先生，○○さんが蹴ってきました。」「先生，ぼくが○○さんに話しかけても知らん顔をします。」と訴えてくる子どもたちがいた。事情を聞くと，まずことの起こりをうまく説明ができずに黙りこんでしまう子，「していないよ。」と自分のやったことを認められない子など，そこには日常生活の中で言葉を使って自分の気持ちや言動をうまく説明できない子どもたちがいた。私はあらためて「ことば」の大切さを感じることになった。自分のしたこと，感じたこと，困っていることなどを自分の言葉できちんと説明できる子どもに育てたい。そのためにもまず学習の楽しさ，考えることの心地よさを味わわせたいと考えた。

児童にとって「楽しい授業」とは，どんな授業だろうか。授業者の問いや友だちの発表の言葉がわかること，しっかり考えることができること，自分の考えを友だちに伝えることができること，学習の中に新しい発見があることと考える。

そこで，「サーカスのライオン」の学習を通して，楽しみながらしっかり学ぶことができる授業をさぐってみた。

「サーカスのライオン」は，年老いたライオンであるじんざが一人の男の子との出会いをきっかけにやる気を取り戻し，その男の子を助けるために，火の中へとびこみ命を奪われてしまう話である。じんざは最後に金色に輝きながら空高く上っていく。じんざは若かりし頃の自信・強さ・逞しさ・元気・勇気を取り戻し，さらに信頼や友情をも得ることができた。本教材を通して，人とのかかわりの大切さを児童とともに考えていきたい。

2　実践の概要

（１）単元名　紙芝居をしよう　教材「サーカスのライオン」（東京書籍３年下）

（２）単元の目標

○「サーカスのライオン」に興味を持ち，文章を読もうとする。

○場面の様子を考えながら，主人公じんざの気持ちの移り変わりを読みとることができる。

○言葉には，考えたことや思ったことを表す働きがあることに気づくことができる。

（３）手だて

①「紙しばいをする」と単元のゴールにむけ，児童は紙芝居を作ることでじんざの気持ちの移り変わりを読みとっていくという活動目標と学習目標を設定する。

②全文を起承転結の４つの場面に分けることを通して，物語の大まかな内容を読みとらせる。

③じんざの気持ちを心内語として書き加えることで，じんざの気持ちの移り変わりを読みとらせる。

④じんざの気持ちが本文のどの言葉からわかるか「どうしてそう思ったの」と根拠を問う発問を取り入れ叙述に即して読み深めさせる。

⑤グループ学習を取り入れ，自分の考えをより発言できる機会を設ける。

（4）指導計画（全１４時間）

次（時間）	学　習　内　容
１次 （２時間）	単元構成表をもとに単元の見通しを持つ。（手だて①） 題名読みや初発の感想を書き，交流する。
２次 （１０時間）	全文を起承転結の４つの場面に分けることを通して，物語の大まかな内容を読みとる。（手だて②・⑤） まず時を表す言葉を手がかりに場面を分け，次につながりのある場面はどこかを考えながら㊀「はじめ」㊁「発端」㊂「山場（クライマックス）」㊃「終わり」に分ける。 本文にじんざの気持ちを心内語として書き加える。（手だて③・④・⑤） ・「おじさんがよそ見をしているのに，じんざは三回，四回とくり返していた。」の後に心内語を書き加える。 ・「じんざは，ぐぐっとむねのあたりがあつくなった。」の後に心内語を書き加える。 ・「じんざはチョコレートはすきではなかった。けれども，目をほそくしてうけとった。じんざはうれしかったのだ。」の後に心内語を書き加える。 ・「じんざは力のかぎりほえた。ウォーツ」の後⑤金色にひかるライオンは，空をはしり，たちまちくらやみの中にきえさった。」の後に心内語を書き加える。 ・「それでも，おきゃくはいっしょうけんめいに手をたたいた。」の後に心内語を書き加える。
３次 （２時間）	グループごとに何枚の紙しばいにするか話し合う。（手だて⑤） 紙しばいの文章を書き写す。

※紙しばいの絵は，図画工作科で行う。

（5）児童の様子

○１次

「学習の見通しを持つ」では，単元のゴールを「紙しばいをしよう」と投げかけた。すると，子どもたちから「２学期に『アナグマのもちよりパーティ』のペープサートを幼稚園の人たちにみせられなかったので，今度こそ幼稚園の人たちに紙しばいを見せたい。」との声が上がった。（どうして見せることができなかったかというと新型インフルエンザの流行で幼稚園訪問が中止になってしまったのである。）相手を幼稚園児にすると，内容が難しいのではないかと思ったが「紙しばい」ということで園児が喜んでくれると思い，「幼稚園の人たちに紙しばいを見せよう」と相手・目的意識を持つことができた。（手だて①）

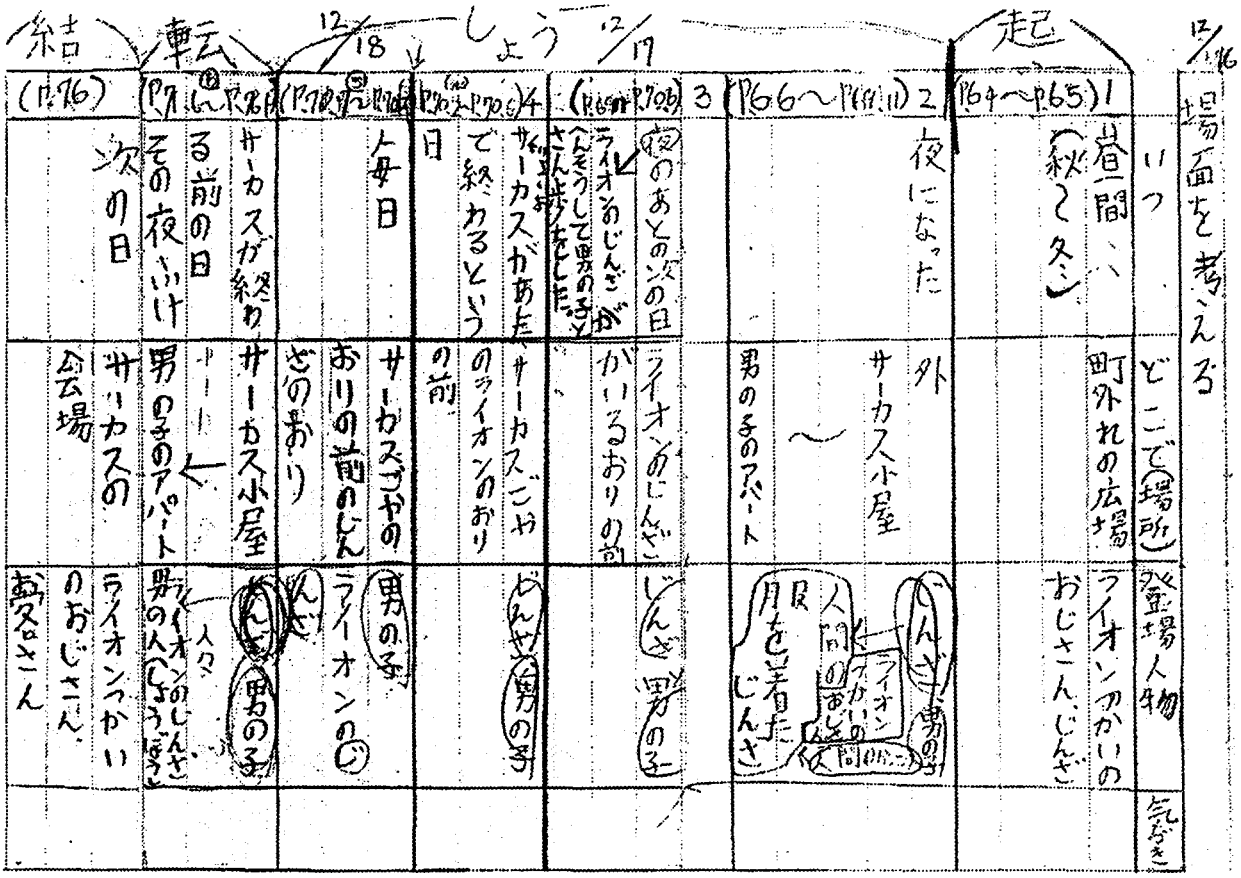
○２次

・本文を起承転結に分ける（手だて②）

「起承転結に分ける」では，１学期の初めの教材『お手紙』（アーノルド＝ノベール作）の時から本文から時を表す言葉を見つけ出し，場所・登場人物を手がかりに㊀「はじめ」㊁「発端」㊂「山場（クライマックス）」㊃「終わり」に分けていった。

はじめに，段落のはじめに書いてある時を表す一文「夜になった。」「次の日，ライオンのおりの前に男の子がやって来た。」「それから，男の子は毎日やってきた。」「いよいよ，サーカスがあしたで終わるという日，男の子は息をはずませてとんできた。」「その夜ふけ・・・・・。」「次の日は，サーカスのおしまいの日だった。」を見つけた。

次に，いつ・どこで（場所）・だれが（登場人物）を表にまとめた。ノートに自分たちが表を書いていくのも１学期に比べスムーズにできるようになってきた。



（資料１）

資料１は，児童が書いた表である。児童はこの表を作りながら物語の大体の内容をつかむことができた。

この表を見ながら

「最後の場面だけじんざはいない。」

「それは，死んでしまったから。」

「じんざは男の子に出会うことができたのは，ライオンづかいのおじさんが散歩に出させてくれたから。」

「だったら，きっかけはあのおじさんが散歩に出させてくれたところかも。」

「いや，本当のきっかけは，男の子と出会ったところだろう。」

「散歩に出させてくれたのは影のきっかけかも。」

「男の子と出会ったところが大切なきっかけだ。」

「でも，あのおじさんが散歩に行かせてくれなかったら，この物語ははじまらない。」

と話し合いは広がり，最後は「大きなきっかけは，男の子に出会ったところだ。」「小さなきっかけはライオンづかいのおじさんが散歩に行かせてくれたところだ。」ということにまとめることができた。

起承転結に分けるとき，どの場面とどの場面がつながるか考えていった。児童はほとんど内容をとらえながら考えていたが，中には「『承』が長くて『転』が短いけど長さが問題ではない。その理由は・・・・・・」と長さにこだわる児童に対してきちんと内容面からアドバイスする児童の姿が見られた。

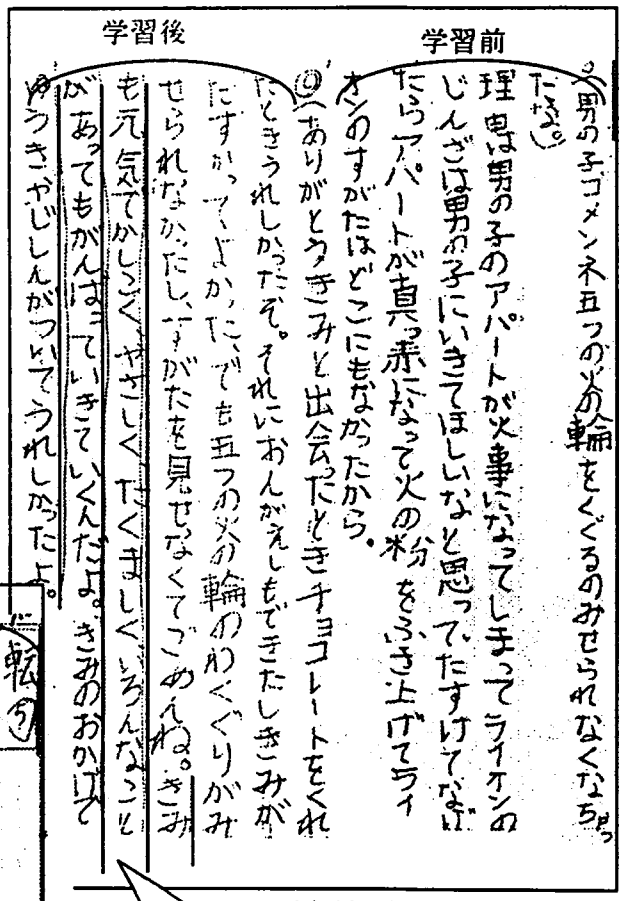
・本文にじんざの気持ちを心内語として書き加える。（手だて③）

単元のゴールで紙芝居をするという活動があるので，本文の中で，じんざの心情をおさえるための重要なポイントとなるであろう６箇所を指導者があらかじめ指定し，じんざの心内語を付け加えるという活動を仕組んだ。この６箇所を選んだ理由は，起承転結のそれぞれの場面において児童が常に話の全体をとらえながら，そのじんざの気持ちの変化を考えることができる箇所であると考えたからだ。

ポイントとした６箇所

起①おじさんがよそ見しているのに，じんざは三回，四回とくり返していた，の後
承②じんざは，ぐぐっとむねのあたりがあつくなってきた，の後
承③じんざは，チョコレートはすきではなかった，けれども，目を細くして受け取った，の後
転④ウォー，の後
転⑤ぴかぴかにかがやくじんざだった，さっきまでのすすけた色ではなかった，の後
結⑥それでも，お客はいっしょうけんめいに手をたたいた，の後

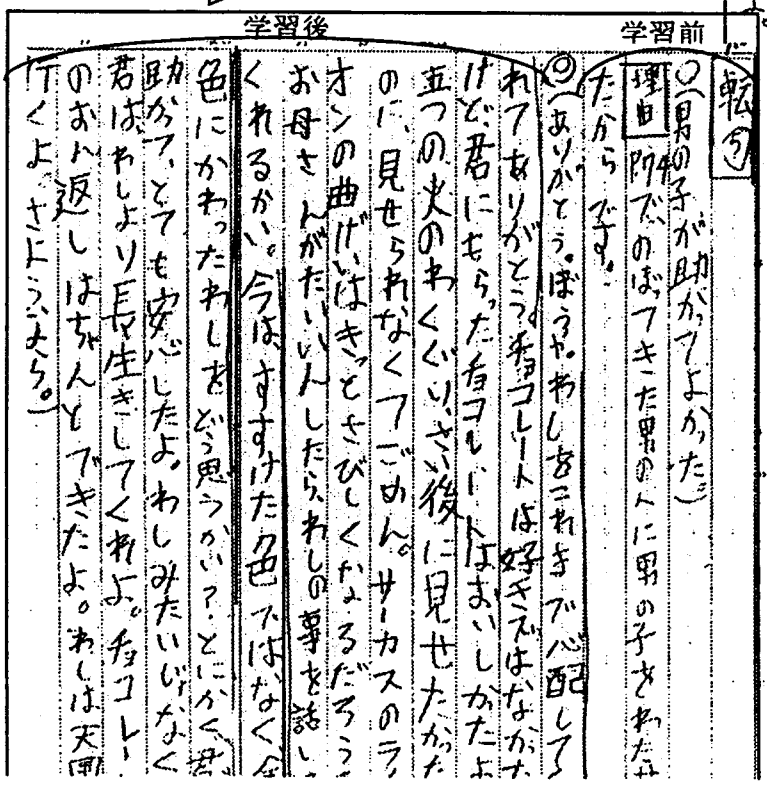
児童は，まず一人学習でじんざの心内語をノートに書いた。その書いたものをもとに小グループ（３－４人）で出し合い，全体で話し合った。全体で学習した後にさらに付け加えていった。



（資料２）

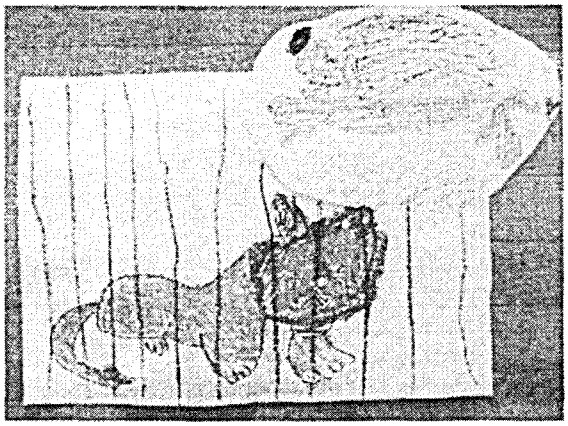
若かったころにもどった今の自分をしっかり理解し，自分のように男の子にもなってほしいという願いがこめられている。自信や勇気をとりもどすことができたのは，男の子のおかげだと自分がかわったきっかけをつかんでいる。

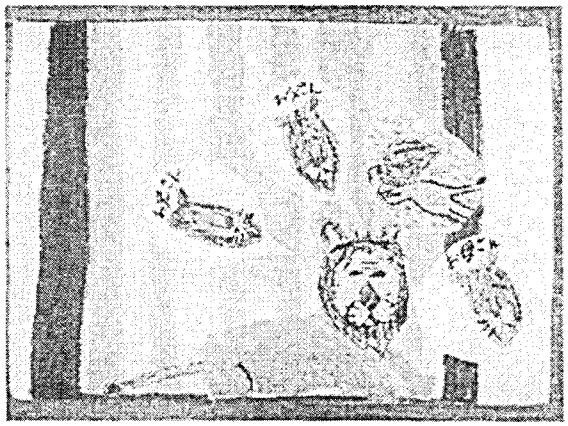
今までのじんざとはちがうんだということをあの男の子に伝えている。それは君のおかげだよということを書いて，きっかけをきちんと理解している。



学習前と学習後をノートに並べて書かせたことで，全体の話し合い後の心内語に変化が見られるのがすぐに理解できた。

・紙しばいの絵





（資料４）

資料４は「紙しばい」の絵である。じんざがおりの中でアフリカの草原を思い出しながら，（アフリカに帰りたい）と思っている場面である。児童は，このように場面と場面のつながりを考えながら，つながるところを絵に表すことで，さらに読みを深めていると思われる。

（６）成果と課題

○単元のゴールを「紙しばいをしよう」としたことで相手や目的意識が明確になり，意欲的に本文を読み深め，単元ゴールをめざすことができた。

○起承転結に分けることで，場面相互の関係をつかみながら内容の大体を読むことができた。

○じんざの心内語を本文に書き加えるという活動は，前の場面を読んだり後の場面を読んだりしながら児童にとって心情の変化をとらえるのに役立った。

●物語を大きくとらえて読むというのはできたが部分部分を細かく読むことについてはまだ十分であるとは言えない。今後教材研究を深め，物語を深く読んでいくためのポイントを絞った細かい読み方を指導していくことが大切である。

3　おわりに

この単元に入ったある日のこと，今まで書くことを大変苦手と感じていたおとなしい一人の児童が国語の授業が終わるなり，「先生，わたし発表したかったのに・・・・。」と言ってノートを持ってきた。ノートを見ると，じんさになってじんざの気持ちをしっかりと書いていた。わたしは思わず「ちょっと聞いて下さい。○○さんがみんなに聞いてもらいたいんだって。」と言うと，その児童は，いつもと違いしっかりした声で読み上げた。読み終わると，どこからともなく拍手が聞こえてきた。もっと早くその児童に気づいていればよかったと反省したのはもちろんだが，その児童が自分から進んでみんなに伝えたいと意思表示してくれたことがとてもうれしかったのである。

学級の子どもたちは，自分の気持ちを「ことば」を使って相手に伝えることができるようになってきている。

今日も元気な子どもたちの声が教室に響く，